

## 論文審査の結果の要旨

### **Gender differences in suicide attempters: a retrospective study of precipitating factors for suicide attempts at a critical emergency unit in Japan**

自殺未遂者における性差：

日本の救命救急病棟における自殺企図の誘因に関する後方視研究

日本医科大学大学院医学研究科 精神・行動医学分野  
研究生 成重 竜一郎

BMC Psychiatry 2012 14:144 doi: 10.1186/1471-244X-14-144.

わが国においては自殺の誘因に関する実証的なデータは乏しく、国を挙げての自殺防止対策が行われている一方で、重点的に行うべき対策を絞り込むのが困難な状況にある。申請者は、日本医科大学附属病院高度救命救急センターに入院となった身体的な重症度の高い自殺未遂者の分析を通じて、自殺企図の誘因における性差を明らかにすることを目的に本研究を行った。

申請者は、2010年3月1日～2012年3月31日の期間に日本医科大学附属病院高度救命救急センターに入院となった身体的な重症度の高い自殺未遂者を対象に、診療録等から自殺企図の誘因、手段、精神科診断、その他背景情報について調査を行い性差について統計的検討を行った。対象は自殺未遂者193例で、自殺企図手段としては過量服薬、飛び降りの順に多かった。182例で何らかの精神疾患が認められ、131例ではすでに精神科治療を受けていた。精神科診断としては「気分障害」、「統合失調症」の順に多く、精神疾患を除いた自殺企図の誘因としては、「家庭問題」、「経済・生活問題」の順に多かった。自殺企図手段の性差としては、過量服薬が女性で多く、有毒ガスが男性で多い性差を認めた。精神科診断の性差としては「大うつ病性障害、双極性障害」と診断された者が男性で多く、「パーソナリティ障害」、「気分変調性障害」と診断された者が女性で多かった。自殺企図の誘因の性差としては、「健康問題」、「経済・生活問題」、「勤務問題」は男性で多く、「家庭問題」、「孤独感」は女性で多い性差を認めた。

以上の結果から、自殺企図には自殺の手段、精神科診断、誘因に明らかな性差を認めることが明らかになった。男性においては「経済・生活問題」、「勤務問題」等の社会的な問題が多く、女性においては「親子関係の不和」や「孤独感」等の社交に関する問題が多いことが示され、この違いは男性と比較して女性において社会参加が少ないわが国の社会構造を反映したものである可能性が示唆された。

本研究は、医療をフィールドとして重篤な自殺未遂者を調査した研究はとして意義がある。また、自殺企図には自殺の手段、精神科診断、誘因に明らかな性差を認めることから、こうした性差に対応した自殺防止対策を行うことが必要であるとことを示した点でも意義深い。

第二次審査においては、方法論から母集団の特徴から結果の解釈などについて、多岐にわたる質疑が行われ、いずれに対しても適切な回答が得られた。

以上から、学位論文として価値あるものと認定した。